

琉球大学学術リポジトリ

家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): 読書環境, 読み聞かせ, 心の理論 キーワード (En): 作成者: 嘉数, 朝子, 池田, 尚子, 友利, 久子, 識名, 真紀子, 島袋, 恒男, 石橋, 由美, Kakazu, Tomoko, Ikeda, Shoko, Shikina, Makiko, Shimabukuro, Tuneo, Ishibashi, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5104

家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果

嘉数朝子¹⁾・池田尚子²⁾・友利久子³⁾・識名真紀子¹⁾・島袋恒男¹⁾・石橋由美⁴⁾

The effect of home environment on reading in the development of theory of mind

KAKAZU Tomoko IKEDA Shoko SHIKINA Makiko
SHIMABUKURO Tuneo ISHIBASHI Yumi

要 約

本研究では、幼稚園児と親を対象として、幼児期の家庭における読書環境と心の理論の発達との関連を検討した。結果は、対象児が5歳後半であり心の理論課題は天上効果を示していたため、両者の関連は明確ではなかった。部分的に明らかになった点は、読み聞かせの頻度や家庭の蔵書数は誤信念の理解と関連していることであった。

Key word : 読書環境 読み聞かせ 心の理論

【問題と目的】

子どもが成長する過程で、本との出会いは重要な意味を持っている。子どもが初めて本に出会うのは、多くの場合は家庭での絵本の読み聞かせであろう。近年若者の活字離れが懸念されているが、親自身がすでにこのような活字離れの世代となっており、家庭に絵本がないという状況もでてきている。このような背景から、近年ブックスタートという、乳幼児健診時に絵本の紹介や読み聞かせについての助言をし、絵本をプレゼントする活動も始まってきた(友利他;2004)。

小林(2000)は、沖縄県の児童を対象に親の関与が読書行動に及ぼす影響を明らかにした。嘉数他(2003)は沖縄県の幼児期における家庭の読書環境の重要性についての検討を行ってきた。幼児

期の読書は絵本が主体となるが、絵本の持つ力は文字習得などの教育的意味だけでなく、情緒的つながりの面でも大きいことが示唆された。本研究では、絵本の読み聞かせを含む家庭の読書環境が幼稚園児の社会的認知、心の理論の発達に及ぼす影響を検討する。「心の理論」とは、最近の発達心理学の中で注目されてきている概念である(アスティントン:1995, 子安ら:2000)。心は、物とちがって直接見たりふれたりすることはできない。しかし、心の働きが理解できないと人間関係はなりたたない。他の人の気持ちを直接知ることができないが、相手の表情やその場の状況から推測することができる。このような心の働きについての理解は生まれつき持っているものではなく、4歳ごろに身につけはじめる。本論文では、はじめに心の理論研究の歴史について説明し、それと絵本との関連について言及し、最後に本研究の目的を述べる。

¹⁾ Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

²⁾ Tomari Kindergarten

³⁾ Okinawa Women's Junior College

⁴⁾ Niimi Public Junior College

心の理論と誤信念課題

柿沼・紺野(1998)によれば「心の理論」という言葉は、霊長類学者のPremack & Woodruff

(1978) によってはじめて使われた。彼らの考え方を人間の子どもに用いたのが Wimmer & Perner (1983) であった。彼らは、子どもは3歳から5歳にかけて人の考えが現実と異なる場合があること（誤信念の存在）を理解できるようになり、それに基づいて「人の行動」を予測できるようなることを示した。彼らは、子どもが他者の表象を理解しているかを明らかにするために誤信念課題を考案した（マキシ課題）。マキシの人形が菓子を部屋のどこかにしまい、部屋を出る。その間に母親（別の人形）がその菓子を別の場所に移動させる。被験者の子どもは、マキシが戻ってきて菓子を食べてよとしたら、どこを探すかを尋ねられる。ほとんどの3歳児はこの問いに正しく答えられない。4歳児はたいてい正しく答える事ができる。3歳児が正しく答えられない理由は、誤信念の存在を理解できないからである。後に課題を自閉症児に理解できるように単純化したものが「サリーとアン課題」であった (Baron-Cohen et al. 1985)。

筋書きを伴わない誤信念課題（スマーティ課題）も考案されている (Perner et al., 1987)。スマーティとは英国の子どもなら誰でも知っている菓子である。この菓子の容器を見せ、子どもに何が入っていると思うかを尋ねる。子どもはスマティーズと答えるが、中を見ると鉛筆が入っている。次に子どもに「まだ箱の中を見ていない友達は何が入っていると思うか」と尋ねると、3歳児の多くは鉛筆と答える。以上のように、心の理論課題には多くの種類が開発されている（以上柿沼の引用による）。

心の理論研究は、現在では一般的な発達を理解する段階から、言語や家族要因など個人差の解明へと移行してきている（森永他, 1999）。心の理論の個人差に影響する主な要因は、言語と社会である。

個人差要因：言語

Moore, Pure & Furrow (1990) 3 - 6歳の幼児80名を対象として比較の助動詞 (must, might, could) や副詞 (probably, possibly, maybe) の理解と誤信念理解の理論の発達が関連していることを見出した。

Astington & Jenkins (1999) は、3～6歳児を対象に初期の言語能力が、後の心の理論の誤信念課題の遂行を予測することを見出した。心の理論と言語発達には深く関わっていることについては、どの研究でも一致している。どちらが先行要因であるかについては、結論が異なるようである。

個人差要因：家族

Youngblade & Dunn (1995) は、初期のごっこ（ふり）遊びは、その後の他者の信念の理解と関連していることを見出した。

Perner, Ruffman & Leekman (1994) の研究結果では、きょうだい数と心の理論課題の遂行の間には正相関が得られた。

Jenkins & Astington (1996) は、家族の大きさと誤信念課題の遂行とは正相関することを報告している。

Lewisら (1997) は、年長のきょうだいと大人の親戚の数は心の理論課題の遂行の分散を説明することを見出した。以上は、家族の要因、核家族でなく拡大家族で年長のきょうだいとの接触の機会の多さが心の理論の理解に貢献していることを示す研究結果である。

森永他 (1999) は、短期縦断研究を行い、初回と再試行の得点差の大きい子どもについて発達経過を詳細に検討したところ、身長・体重が加速度的に伸びていること、家庭環境に大きな変化があることが判明した。この事例は心の理論発達における初期環境の重要性を示すだけでなく、良い環境へ変化した場合、子どもは急激に発達を遂げる可能性があることが示唆された。

個人差要因：家族と言語の要因

家族のサイズや形態だけでなく、家族内で使用される言語と心の理論の発達を関連を検討した研究を以下に紹介する。Furrowら (1992) は、2歳のときに母親の使う内的状態語（考える、知っているなど）の頻度は、子どもが3歳になったときにそれを使用する頻度を予測すると述べている。

Dunnら (1991) は、33ヶ月に母親やきょうだいと内的状態について因果的会話を交わす程度は40ヶ月の時点での子どもの役割取得課題の遂行に関連することを報告している。

Ruffman, Slade & Crowe (2002) は母親の発話と心の理論について、3歳児82名を対象に半年間隔で3回縦断研究を行なった。子どもが3歳のときに母親が内的状態語の使うことが、半年、1年後の子どもの心の理論の理解に関連していることを報告している。

このように子どもの心の理論の発達には、他の認知発達と同様に、生得的要因と環境的要因の双方が関連していることが明らかになってきている。中でもDunnらは一連の家庭訪問による縦断的観察研究から、兄弟の数や家庭内で交わされる会話の種類ややりとりの質が後の心の理論の発達に影響することを指摘している。これは、乳幼児期の養育環境から、後の心の理論の発達をある程度予測できることを示唆している。

以上のように、家族要因は、言語の使用とも深く関連している。また、家族要因は社会経済的地位や親の学歴なども輻輳しているので、単純に1つの要因のみを実験計画として取り出すことは困難である。したがって、上述の研究結果は、範囲を限定するなどして、一般化は慎重にせねばならない。

以上の家族要因に関する研究結果からいえることは、経験の潜在的役割、すなわち他者の内的状態 (mental states) を観察することができる経験があるかどうか、心の理論概念の発達に大きな影響力を持つことが浮かび上がってくる。すなわち、心の理論課題で必要とされる能力とは、他者の内的状態と観察可能な行動の間のある関係をつかむ能力ともいえるからだ。

物語 (絵本) と心の理論の発達

他者の心的状態を観察する媒体として、物語、幼児の場合は絵本、は優れた媒体である。Bruner (1990) は人間の意味理解の基本的な形態として人は物語を利用する。登場人物の希望、欲求、感情などの主観的状态など他者を理解するためには、物語は適した媒体である。素朴理論や物語を利用する幼児にとっての主な源泉は児童文学、特に絵本である。

人は物語の中で、他者の心情や、意思、希望、要求などを理解する。言い換えると、人は、他者の理解のために、物語の形で心の理論や素朴理論

を用いる。誤信念課題は、たとえば、子どもたちが大好きな絵本の「赤頭巾ちゃん」や「おおかみと7匹の小山羊」などに含まれている。保育士の田代は子どもがこのようなハラハラどきどきする絵本が大好きであると報告している。なぜ、子どもに好まれるのかという問いに対し、田代は「観客は知っているが、登場人物は知らない」という対比的状況が共通しているという。この対比は、じつはサスペンスドラマの定石であることを田代 (2001) は述べている。ヒチコックの意図したサスペンスにも、この対比が使われている。子どもの好きな絵本には、狼の変身 (おばあちゃんや母への変身) が登場するが、これはある意味で誤信念課題である。狼がだまそうとする場面では、登場人物は知らないが子どもたちは知っているため「赤頭巾ちゃん気をつけて」「狼だよ、ドアをあけないで」と興奮しながら叫ぶ様子が報告されている。絵本は子どもに心情理解や誤信念の理解の場 (訓練) を提供する。子どもは、絵本の中で誤信念課題を楽しんでいるともいえる。

Cassidy 他 (1998) は Bruner (1990) の理論を実証するためには就学前児が典型的に読む本に心の理論が含まれているかどうかを検討した。47人の親を対象に、子どもの絵本の代表的サンプルを集めるために、毎日読んでいる本が心の理論概念の情報をどの程度あたえているか、これを客観的に遂行するために、1週間という期間子どもが読んだ (読み聞かされた) 本を記録した。その結果、合計で432冊が記録された。絵本の種類を以下の3タイプに分類した。①物語、②ノンフィクション (情報; 例: 昆虫, 状況: 例: 病院に行く, 道具的: 花の育て方) ③言葉遊び (例: リズム, くりかえし, 韻をふむ)。分類の結果、9割以上が物語で、24%が言葉遊びを含んでいた。多くの本が心の理論を含んでいた。心の理論の下位分類としては内的状態 (感情, 思考, 欲求など), 誤信念, 人格特性 (やさしい, いじわる, こわいなど) の3タイプがある。分析の結果、78%の本が内的状態を、34%が誤信念を、43%が人格特性を含んでいた。誤概念の下位タイプ: 変装, 位置, ふり, 他者の記述, 情報の欠如などが含まれていた。以上の結果から、幼児への読み聞かせの中で、心の理論の概念は統合的に含まれていることが示唆さ

れた。

嘉数他（2003）は、公立幼稚園で半年間園児に貸し出した本を全部リストアップしたところ、360冊が記録されていた。そのタイトルからCassidy 他（1998）のカテゴリーにしたがって分類を行った。その結果、85%が物語で15%がフィクションであった。言葉遊びのみで構成された絵本はなく、物語の中で展開されているものがあった。このことから、日本においても米国のCassidy 他（1998）の結果と同様に、就学前児に好まれる絵本の多くは、物語であるといえる。

米国のCassidy 他（1998）の研究は絵本と心の理論を結びつけた点で独自性がある。しかし、彼らは、読書環境の違いが子どもの心の理論の発達に影響するだろうと考察はしているものの、実証はしていない。

本研究の目的

本研究では、幼児の読書環境を保護者への調査で明らかにし、それと幼稚園児の心の理論の発達との関連を明らかにすることを目的とする。

【方法】

対象者：沖縄県N市立Y幼稚園年長児32名（男16名、女16名）と、その保護者23名であった。

手続き：心の理論課題発達検査（The Theory of Mind Developmental Test：略してTOM）（森永・東，2003）を対象児全員に個別に実施した。家庭の読書環境調査は、担任から園児を通して各家庭に配布した。1週間後に回収した。回収率は72%であった。

心の理論課題：①表情の理解、②げた箱課題（誤信念課題）、③はさみ課題（すじがきのない誤信念課題）、④クレヨン課題（誤信念課題）、語彙課題（補助課題）からなる。②④は物体が移動する課題であり、③は容器が入れ替わる課題であった。

家庭の読書環境：秋田・無籐（1996）を参照して作成した。

- ① フェイスシート（家族形態・家族数・きょうだい数・出生順位）
- ② 子どもへの読み聞かせの現状（頻度・開始

時期等）

- ③ 親の考える読み聞かせの意義5項目
- ④ 読書環境（絵本の購入・家庭の蔵書数・蔵書の種類・図書館利用）
- ⑤ 親自身の子どもの頃の読書経験・読書に対する評価
- ⑥ 子どもの読書傾向（読書に対する評価・お気に入りの本の有無等）

以上計16項目の調査用紙を、9月に園児を通して保護者へ配布し、約1週間後にクラス担任へ提出してもらった。

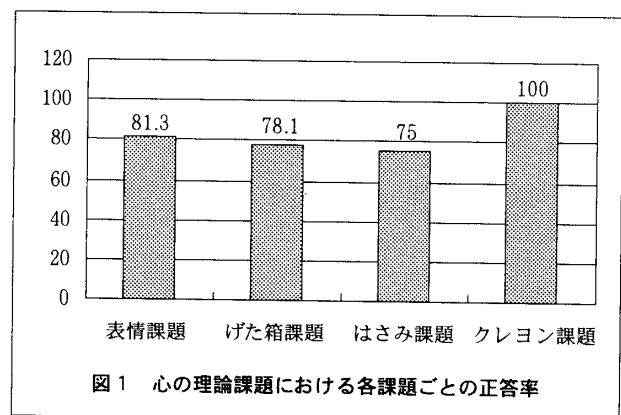
結果

1 基本的属性

被験者の基本的属性は以下の通りであった。家族形態は、核家族59.4%で、拡大家族が12.5%であった。家族数は平均4.5人（2～7人）であった。きょうだい数は、平均2.5人（1～5人）であった。出生順位は、長子15.6%、中間子15.6%、末子40.6%であった。

2 心の理論課題の正答率：

各課題ごとの正答率を図1に示した。正答率の高い順から示すと、クレヨン課題100%、表情課題81.3%、げた箱課題78.1%、はさみ課題75%と続いていた。この結果から、筋書きのない誤信念課題（クレヨンの箱にはさみを入れる課題、スマーティーズ課題の一部を応用したもの）が最も正答率が低いことが分かった。筋書き、すなわち、幼児にとって物語を伴った場合のほうが、他者の思考の理解が容易であるといえる。同じ誤信念課題の中でも、クレヨン課題のほうがげた箱課題より



も正答率が高い理由は、前者のほうが施行時間が短く（後者では靴の着脱などがある）、課題の記憶の点で容易であるためと思われる。

これは、柿沼・紺野（1998）の行った結果と項目ごとの難易度の順序性については同じである（クレヨン課題100%、表情課題93.3%、げた箱課題82%、はさみ課題68%）が、項目ごとの正答率は異なる。表情課題においては最も差が大きく（18.7%）、次にクレヨン課題（6.2%）、げた箱課題（2.9%）と本研究のほうが正答率が低い。はさみ課題においては本研究のほうが高かった（3.9%）。表情課題の正答率の低さが顕著である。表情理解課題の得点は2、1、0点で分布する。本研究の場合、0点が1名、1点が5名であった。正答の2点は26名である。1点のものは、「泣いている」ことは答えられたが、泣いている理由の説明ができないものである。

3 心の理論課題における内部相関

「げた箱課題」は、「表情課題」との間に $r = .32$ ($p < .05$)、「クレヨン課題」との間に $r = .52$ ($p < .01$) の正相関がみられた。げた箱課題の得点が高いほど、表情の理解ができており、またクレヨン課題においても得点が高いことがわかった。「クレヨン課題」と「はさみ課題」との間に $r = .37$ ($p < .01$) の正相関がみられた。クレヨン課題の得点が高いと、はさみ課題の得点も高くなる傾向にあることがわかった。

4 読書環境について

Y幼稚園における全体的読書環境については、

付録で図示した。主な結果のみを以下に示す。読み聞かせの頻度は「ときどきする」が9割を超えていた。6%、「毎日する」と、「まったくしない」は共に4%であった。読み聞かせを始めた時期は、0歳から（28%）と1歳から（29%）が半数を占めた。読み聞かせをするものは母親が6割以上と最も多く、複数は39%であった。1日の読み聞かせの時間は30分以内が57%、10分以内が43%であった。絵本の購入は、「ときどき買う」が8割弱で、「よく買う」と、「買ったことがない」は共に4%であった。子どもの読書への評価は、「好き」が70%で、「とても好き」が17%で両方で9割近かった。「あまり好きでない」ものも13%いた。親自身子どもの頃の読み聞かせの経験では、経験有りが26%、経験無しが67%であった。親自身の読書への評価は、「好き」が48%、「とても好き」が4%、「あまり好きでない」は48%であった。家庭における蔵書数は、100冊以上が26%と最も多く、51~100冊は30%、31~50冊と0~30冊は共に22%であった。図書館や書店に連れていくかについては、「ときどき行く」が70%と最も多く、「よく行く」は26%、「行かない」は4%であった。

5 読み聞かせの意義

読み聞かせの意義（図2）として、「集中力」「創造性」「親子の触れ合い」を重視する親が多かった。「触れ合い」「集中力」「話を聞ける」「創造性」の項目は、「とても」と「やや」をあわせると「あてはまる」が100%になっているのに対し、「文字を覚える」だけは「あてはまらない」が40%近かった。

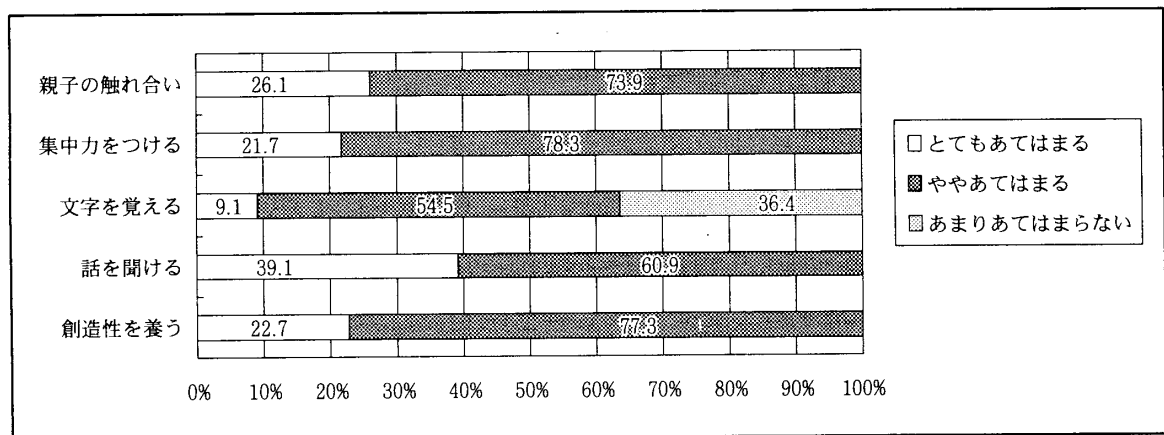


図2 読み聞かせの意義

6 読書環境と心の理論課題における相関

読書環境の各項目と心の理論課題得点との相関を表1に示した。「読み聞かせをする」とげた箱課題との間に $r = .39$ ($p < .10$) で、有意な傾向の正の相関がみられた。読み聞かせを行っている保護者の子どもは、ストーリー性のある誤信念課題である、げた箱課題の得点が高いことがわかった。

「家庭の蔵書数」とげた箱課題との間に $r = .47$ ($p < .05$) の正相関がみられた。蔵書数が多い方が、げた箱課題の理解が発達していることが示された。その他の変数間には有意な相関は得られなかった。

注) クレヨン課題の正答率が100%のため、読書環境の各項目とクレヨン課題の相関は見ることはできなかった。

7 読み聞かせの意義と心の理論課題における相関

読み聞かせの意義得点と心の理論課題得点との相関を表2に示した。「文字を覚える」と表情課題との間に $r = -.37$ ($p < .10$) で、有意な傾向の負の相関がみられた。読み聞かせにおいて、親が文字を覚えることを重視すると、子どもの他者に対する表情理解の得点が低くなる傾向にあることがわかった。

「触れ合い」と心の理論合計得点との間に $r = .36$ ($p < .10$) で、有意な傾向の正の相関がみられた。読み聞かせにおいて触れ合いを重視すると、子どもの心の理論得点が高くなる傾向にあることがわかった。その他の変数間には有意な相関は得られなかった。

※クレヨン課題の正答率が100%のため、読み聞かせの意義の各項目とクレヨン課題の相関は見ることはできなかった。

表1 読書環境と心の理論課題における相関

	表情課題	げた箱課題	はさみ課題	クレヨン課題	合計
読み聞かせの頻度	.000	.389*	-.320	-	.000
始めた頃	.178	.045	.205	-	.410*
読み聞かせの時間	.060	.060	.182	-	.078
絵本の購入	.319	.007	.151	-	.090
子どもが読書好き	.036	.036	-.120	-	-.007
親自身の経験	.011	.011	.178	-	-.053
親が読書好き	.052	.251	-.171	-	.067
家庭の蔵書数	.256	.465*	-.237	-	.154
図書館へ連れていくか	-.256	.197	.097	-	.138

†... $p < .10$ *... $p < .05$ ***... $p < .01$

表2 読み聞かせの意義と心の理論課題における相関

	表情課題	げた箱課題	はさみ課題	クレヨン課題	合計
創造性を養う	.026	.307	.095	-	.136
話を聞ける	-.133	.102	-.143	-	-.111
文字を覚える	-.365*	.209	.144	-	.055
集中力をつける	-.242	.036	.110	-	-.061
親子の触れ合い	.250	.250	.253	-	.358*

†... $p < .10$ *... $p < .05$ ***... $p < .01$

考 察

誤信念課題

3つの誤信念課題の正答率の分析から、筋書き、すなわち、幼児にとって物語を伴った場合のほうが、他者の思考の理解が容易であるといえる。クレヨン課題のほうが、げた箱課題よりも正答率が高い理由は、前者のほうが時間が短く（後者では靴の着脱などがある）、課題の記憶の点で容易であるためと思われる。物語の心の理論概念の理解に及ぼす効果が確認された。クレヨン課題では全員が正答であった。これらの結果から、TOM課題は、幼稚園年長児では、天井効果に達していた。

読書環境と誤信念の理解

TOM課題が天井効果に達しているため、読書環境と語信念課題との関連はこの年齢では明確ではなかった。わずかに関連がみられたのは下記の2つであった。読書環境の中の「読み聞かせ」では、「読み聞かせの頻度」が誤信念の理解と関連があった。つまり、最も難易度の高い誤信念課題の遂行と現在読み聞かせをする頻度との間に有意な正相関があった。幼稚園の時期に読み聞かせを行っていることが、誤信念課題の理解に関連していた。

読書環境の中で「家庭の蔵書数」とげた箱課題との間にも有意な正相関がみられた。蔵書数が多い方が、誤信念の理解が発達していることが示された。蔵書数は、経済状態や住居の広さ、親の読書傾向、学歴や職業などとも関連していることが予想される。本研究では社会経済的地位を統制していないので、純粋に蔵書数の効果だけと結論づけるには慎重であるべきだろう。

本研究では頻度や冊数という量的な変数だけでなく、内的な変数も検討した。読み聞かせの際に何を重視するかと質問した。その中で心の理論課題の遂行と関連があったのは「触れ合い」と「文字を覚える」の2つであった。前者は心の理論合計得点との間に中程度の有意な正相関がみられた。読み聞かせにおいて親子の触れ合いを重視すると、子どもの心の理論の遂行が高くなる傾向にあることがわかった。

「文字を覚える」と表情課題との間に中程度の有意な負の相関がみられた。絵本は教育的観点、

すなわち学校での学習のためと捉えることももちろん大切な意義ではある。しかし、絵本には狭い意味での文字学習だけではない、社会的認知を促進する働きがあることを保護者の方には認識していただきたいと思う。特に、他者の表情を読み取り、因果関係を説明する能力は、友人関係には欠かせない能力であるといえる。

本研究は被験者の数や年齢などからくる限界があり、結論づけるには慎重であるべきだろう。しかし、絵本、とくに物語の心の理論の発達への影響、すなわち物語が社会的認知に及ぼす貢献については主張できるだろう。

今後の課題

本研究の限界としては、環境の変数が質問紙によって得られたものあることだ。頻度は反映しているだろうが、読み聞かせ方、などは質問紙では測定できない。親子の読み聞かせの場面の観察によって、親が使用する内的状態語の種類や頻度などが測定できるだろう。今後の方向性として質的分析のためには、親子の実際の読み聞かせの観察が必要になるであろう。

読み聞かせについての観察研究はないが、関連するものとして、母親の子どもへの語りの観察研究がある。柿沼・上村（2003）は、異なった地域の母親の語りを通して、子どもがどのように自らの語りのスタイルを獲得するかを検討するために、母親の語りの発話構成および母子相互作用の地域差（東京・沖縄）の検討を行った。沖縄と東京の母親の語りには、1）言及項目数、2）語りのスタイルに違いがみられた。東京の親は沖縄の親に比べ言及項目数が多いだけでなく、その範囲は日常生活ならびに未来へのものが含まれていた。また、解釈の根拠を提示する傾向がみられた。沖縄の母親は絵の中の中心的な要素に止まっている。つまり現在に焦点化して短時間に提示していた。語りのスタイルにおいては、両地域ともに基本的には親主導で、子どもが意思表示をするとそれを受容していた。全体的に沖縄の親が子どもにシンプルな形で状況を説明するのに対して、東京の親は手がかりを示して、興味を喚起する傾向があった。

読み聞かせのやり方においても、柿沼の研究の

ような文化差があるのだろうか。神谷（2003）は、「読み聞かせ」を社会・文化的な行動として捉え、そこに子育てに対する親の考えが大きく反映すると述べている。神谷は母親の学歴や子育て観など読み聞かせ行動との関連を検討している。また、読み聞かせと子どもの言語発達との関連についても検討している。残念ながら、神谷においても、母親に対しては質問紙による自己評価のみである。神谷の結果から、読み聞かせが社会文化的な行動であること示された。とするならば、読み聞かせについても、文化差も予想される。読み聞かせのやり方の観察研究における文化差についても今後の検討課題である。

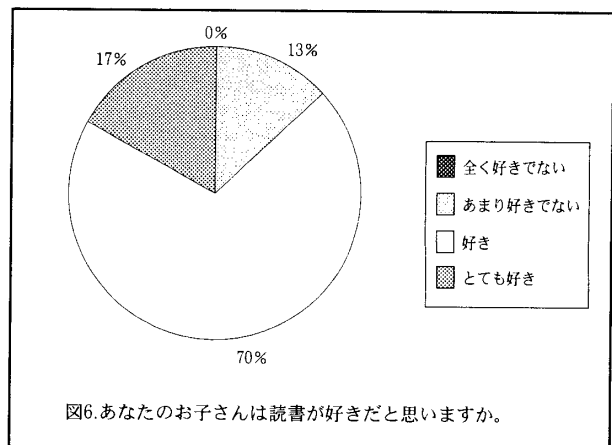
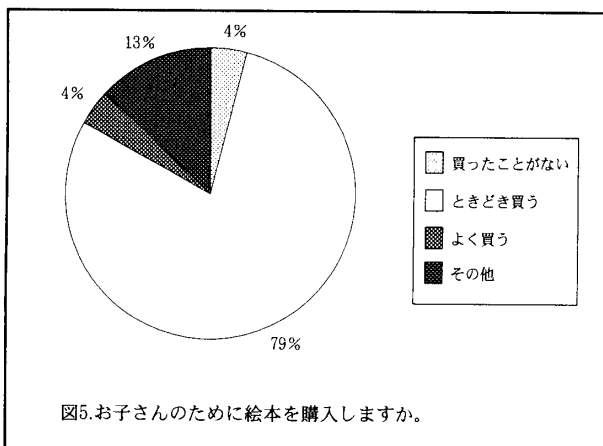
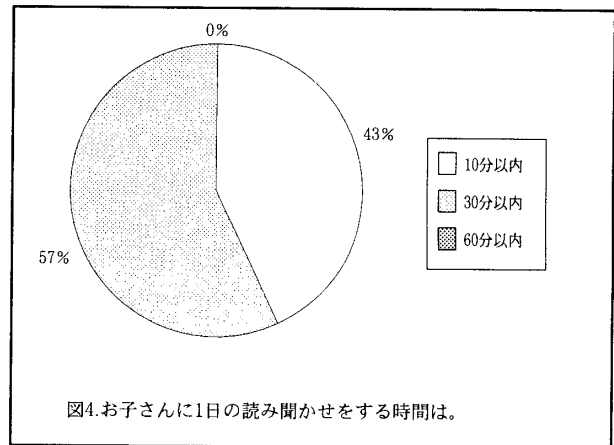
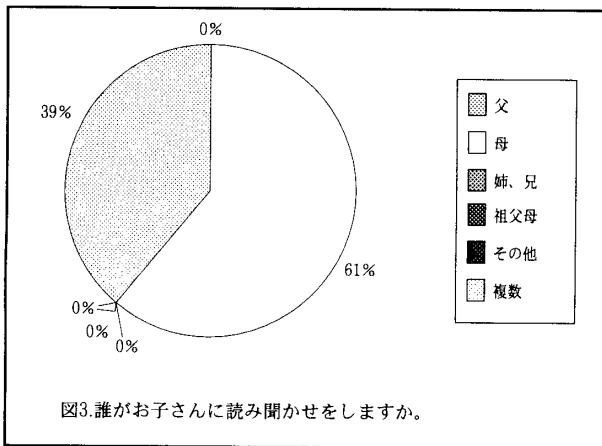
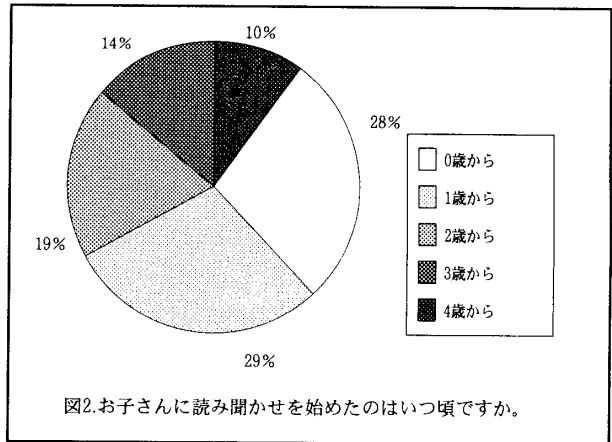
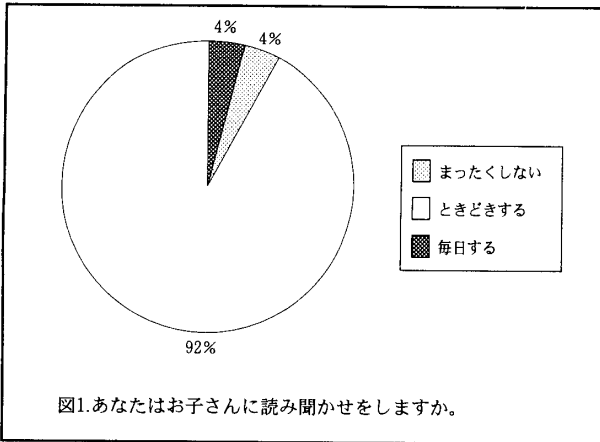
引用文献

- 秋田喜代美・無藤隆 1996 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討 教育心理学研究, 44, 109-120.
- アスティントン, J.W. 松村暢隆訳 1995 子どもはどのように心を発見するか 新曜社
- Astington, J. H. & Jenkins, J. M. 1999 A longitudinal study of the relation between language and theory of mind development, *Developmental Psychology*, 5, 1311-1320.
- Baron-cohen, S., Leslie, A. M. & Firth, U. 1985 Does the autistic child have a 'theory of mind'? *Cognition*, 21, 37-46.
- Bruner, J. 1990 Acts of meaning, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Cassidy, K. W., Ball, L. V., Rourke, M. T., Werner, N. R. S., Feeny, J., Chu, Y. D., Lutz, J. & Perkins, A. 1998 Theory of mind concepts in children's literature. *Applied Psycholinguistics*, 19, 463-470.
- Cutting, A. L., & Dunn, J. 1999 Theory of Mind, Emotion Understanding, Language, and Family Background: Individual Differences and Interrelations, 70, 853-865. *Journal of Developmental Psychology*, 11, 107-123.
- Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., Tesla, C., & Youngblade, L. 1991 Young children's understanding of other people's feeling and beliefs. *Child Development*, 62, 1352-1366.
- Furrow, D., Moore, C., Davidge, J., & Chiasson, L. 1992. Mental terms in mothers's and children's speech: Similarities and relationships. *Journal of Child Language*, 19, 617-631.
- Jenkins, J. M., & Astington, J. W. 1996. Cognitive factors and family structure associated with theory of mind development in young children. *Developmental Psychology*, 32, 70-78.
- 嘉数朝子他 2003 幼児の読書環境を拓くための予備的研究 琉球大学教育学部教育実践センター紀要 5, 1-11.
- 柿沼美紀・紺野道子 1998 心の理論の臨床への応用(1) 白百合女子大発達臨床センター紀要, 2, 13-21.
- 柿沼美紀・上村佳世子 2003 母親の語りに見られる地域差(2) 発達研究, 17, 87-96.
- 小林貞治 2000 親の関与が児童の読書行動に及ぼす影響 上越教育大学院修士論文
- 子安増生・服部敬子・郷式徹 2000 幼児が「心」に出会うとき 有斐閣
- 神谷美智子 2003 読み聞かせと母親の子育て感および子どもの言語発達との関連 金城学院大学人間生活研究科修士論文要旨集
- Lewis, C., freeman, N.H., Kyriakidou, C., Maridaki-Kassotaki, K. & Berridge, D.M. 1997 Social influences on false belief access: Specific sibling influences general apprenticeship. *Child Development*, 67, 2930-2947.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Gupta, M.D., Fradley, E., & Tuckey, M. 2002 Maternal Mind-Mindedness and Attachment Security as Predictors of Understanding Theory of Mind Understanding, *Child Development*, 73, 1715-1726
- Moore, C., Pure, K. & Furrow, D. 1990 Children's understanding of the modal

- expression of speaker certainty and uncertainty and its relation to the development of a representational theory of mind. *Child Development*, 61, 722-730.
- 森永良子・東洋 監修 2003 心の理論課題検査法 文教資料協会
- 森永良子・紺野道子・黛雅子・中石康江・柿沼美紀 1999 心の理論の臨床への応用(3) 白百合女子大発達臨床センター紀要, 3, 2-7.
- Perner, J., Ruffman, T., & Leekam, S.R. 1994. Theory of mind is contagious: You catch it from your sibs. *Child Development*, 65, 1228-1238.
- Perner, J., Firth, U. Leslie, A. M. & Leekam, S.R. 1989 Exploration of the autistic child's theory of mind. *Child Development*, 60, 689-700.
- Premack, D. & Woodruff, G. 1978 Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral Brain Sciences*, 4, 515-526.
- Ruffman, T., Slade, L., & Crowe, E. 2002 The relation between children's and mothers' mental state language and theory of mind understanding. *Child Development*, 73, 734-751.
- 田代康子 2001 もっかい読んで! ~絵本をおもしろがる子どもの心理~ ひとなる書房
- 友利久子・嘉数朝子・若松昭子 2004 親子間のコミュニケーションスタイルについての考察 I 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 6, 99-109.
- Wimmer, H. & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs. *Cognition*, 13, 103-128.
- Youngblade, L. M. & Dunn, J. 1995 Individual differences in young children's pretend play with mother and sibling: Links to relationships Understanding of other people's feelings and beliefs. *Child Development*, 66, 1472-1492.

Y幼稚園の読書環境結果

付 録



家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果

